もたらしていたことは確かである。私の様に人づき合いの悪いはにかみ屋でも，この人から愉快な印象を受けた覚えがある。1950年の7月，卒論テーマを高山氷河遺跡にもとめたこともあって，二級下のS君をカメラマンにしたて，槍穂から黒部奥にかけて相当長期間のフィールドワークに出掛けた。小さなテントを張り，モレーンやルンドヘッカーを探しながら，ハイ松の茂みや石礫の原をかけまわって二週間以上も過した頃である。夏雲の湧きあがる，人里を遠く離れた奥山の中で，仙人の様な気持で雲表を行く醍醐美にひたっていると，岩蔭から突然あらわれた少数パーティの中に，何とにこやかに微笑む丁女史がいるのではないか。野口五郎岳の南側圏谷壁の上で，歓談数分に及んだことは云うまでもない。偶然というには余りに舞台装置の整い過ぎた感じであるが，楽しい充足した思い出をして今でも心に鮮に残っている。女性には生活を芸術的にする様な尊敬すべき才能があるのではないかと思う。その点本学学生に接してもしばしば感ぜられる。女子学生をクラスメートに持ったことの功罪は，こうした面に発揮されることではないかと思っている。

天気予感

吉田栄夫

今年も梅雨前線が停滞する頃となった。涼しい爽やかな風と，むっとする暑さ－ドイツ語にnaßkalt という言葉があるが，これはまさにnaßheiß－の交錯に，気塊の動きを肌に感ずる時期である。

梅雨時となるとよく想い出すのは，卒論の年のことである。卒論とは関係なしに，6月初め，S先生やI先生の御伴をして北九州を訪れた。1日フィールドを歩いただけであとは全部雨という始末，1週間近い滞在を無為に過して引揚げたが，下関から姫路まで，水田の大半は水に没していた。この後で，関門トンネルに濁水が流入するという騒ぎが起った時のことである。7月に入っても一向に前線は北上せず，紀州は湿舌とやらの御蔭で大水害に見舞われることとなった。

この天候はさらに引続いて，夏休み，総計1月ほどの間，フィールドにとった北八ケ岳に入って，地味な調査を試みることにしたが，この間歩けたのはやっと1の日という有様だった。東北地方南部や中部地方の山間部は，ひどい冷害を受けた。秋になって夏の遅れを取戻すべく，再びフィールドに出掛けた私は，今度はこの冷害に悩まされた。当時，誰もいない別荘の一つを拝借してベースとし，自炊をしながら山歩きをしていたが，麓の水田には実らぬ稲が穂を立てて秋風にそよいでおり，農家の人がパンやウドンを買って

いる状態で，お金を出してもお米が手に入らず，止むなくウドン腹をかゝえて，山登りをする破目となったこともある。

ところで，日本人の挨拶は，天候に関することが多いと云われるが，われわれフィールドに出ることの多い者は，天気に余計関心を抱かざるを得ない。都会にいれば，天気予報の適中率の悪さに文句をつける位で済むが，高い山などでは時に生死を分つからである。そこで，天気予報ならぬ天気予感を試みることになる。いわゆる観天望気は，局地的な天候の推移に知識があれば，かなり信頼できるものらしい。式先生と赤石山地を訪れた時，塩見岳近くの小ピーク高谷山の頂上で，暮れかゝる西の空の，澄んだ青空と縁辺を輝かせる層積雲の美しさに息をのんだことがあるが，期せずして二人の口から洩れたのは，〃明日は嵐だな〃という言葉であった。果して翌朝は雨，濡れそぼれながら，下界への道を辿ることとなった。別の時，同じ南アの赤石岳の頂きで，晴れ渡った朝の空の一隅に，数条の巻層雲を眺め，道を急いで，小屋の直前で雨となったこともある。

さらに神がかり的となると，長期予感も偶然適中することがある。昭和29年，今年は空梅雨に近いぞと，気象庁予報に対抗して予言したところ，東日本ではまさに空梅雨模様，気候学専攻のM先輩に動物的感覚と笑われた。

南極のような気象資料の乏しいところでは，予報はさらに予感的となる。専門家はさすがに慎重で，なかなか明確な結論を下さない。そこで素人達はわいわい始める。ことに，突如として天候が変って痛い目に遭わされることにでもなると，空を眺める習性も自然に身につく。昭和基地では，気圧が極めて低い時でも，天候が良いことが多いが，気圧がぐんぐん上昇してくる時は危い。次にガクンと急降下して嵐となるからである。バロメーターに目をとめての予感は，フィールドでは難しい。風向や風速，気温を頬で感じながら，雲行きを確かめる。こうした皆の経験を基にして，観天望気の *manual* を考えたこともあった。

近頃は，トランジスタラジオの御蔭もあって，こうした原始的感覚は鈍ったらしい。しかし，こんな事も考えながらフィールドを歩けば，暑さも寒さも，また悪天候にも，さして腹が立たなくなるのは，天気予感の妙味である。

お茶大に来て

原　　高　則

3月末日。送別会の席で騒がしく話す私に向って同級生の一人が言いました。「君は何処へ行ってもいいけどあまり喋らないほうがいいよ。喋ると地がでてしまうが黙っていれば結構，貫録があって立派に見えるよ。」ほめら